

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K17599

研究課題名(和文) 専門職の知識と市民の価値を統合する死生観教育モデルの開発

研究課題名(英文) Development of educational model of life and death that integrates knowledge of professionals and values of citizens

研究代表者

高橋 在也 (Takahashi, Zaiya)

千葉大学・大学院医学研究院・特任研究員

研究者番号：30758131

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本における死生観教育のモデル開発として、本研究では医学・看護学領域および哲学・教育学領域における「対話」のモデルをもとに考察をすすめてきた。本研究の成果として、「対話とは、自分の言葉が大切にされる体験であり、暴力を遠ざけるもの」という暫定的定義を提唱した。それを補助する対話の4つの性質を整理した。1、対話(dialogue)はひとりでは行えない。2、対話をするとき、ひとは自分自身とも対話している。3、自分自身との対話とは、思考のことであり、対話においては(思考に由来する)「自由な迷い」がある。4、のびやかな雰囲気なかで、他者に対して、またそれ以上に自分自身に対して意識が開いている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療におけるアドバンスケアプランニングをはじめ、対話の重要性は社会的に注目されつつある。本研究成果は、対話における人生の捉え返し(ライフレビュー)にも応用可能である。

研究成果の概要(英文)：In order to develop a model for life and death education in Japan, this study has examined "dialogue" models in the fields of medicine and nursing, as well as philosophy and education. As a result of this research, we have published the article "What is Dialogue: Self-interactivity of Dialogue". We proposed a tentative definition: "Dialogue is an experience in which one's speech is valued and violence is kept away". The four properties of dialogue that assist in this are summarized as follows.1. Discourse is a solitary act, whereas dialogue cannot be done alone.2. When one engages in dialogue, one is also in dialogue with oneself. (Self-interactive nature of dialogue)3. Dialogue with oneself means thinking, and in dialogue there is "free hesitation" (derived from thinking).4. In a relaxed atmosphere, there is an openness of consciousness toward others and even more so toward oneself.

研究分野：エンドオブライフケア学/成人教育

キーワード：対話 対話の自己内対話性 自由な迷い 暴力への抵抗的性質 死生観 エンドオブライフケア 死生観教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 超高齢社会において、本人の意思を尊重した質の高いエンドオブライフケア（end-of-life care: EOLC）が喫緊の課題となっている。エンドオブライフケアの概念は、先行するターミナルケア・緩和ケア等の概念を背景に、狭義の終末ケアや医療的措置に留まらない、地域生活のサポートや質の高い生き方を支援する、より包括的な終末期のケア概念として発展してきた（European Association of Palliative Care 2008, Izumi et al. 2012）。現在の課題は、地域包括支援システムの一環としてエンドオブライフケアを地域にどう実装していくかという段階にある。高齢者に対する医療のシステムと地域生活サポートシステムを、人生の最期のトータルなケアという視点でどのように接続していくかが問われている（長江 2014, 増島 2016）。その具体的手段として、アドバンス・ケア・プランニング(Advance Care Planning: ACP)が注目されている。ACPは、米国において、事前指示書（Advance Directive: AD）と呼ばれる終末期治療に対する意思表示文書をより本人の意思が反映・尊重されるものにするために、ケアプランや希望・価値について本人を中心に話し合う試みとして発展したものである（足立・鶴若 2015）。現在は、事前指示書の作成に目的を限定せず、死とどう向き合うか、死を意識した時どのように生きたいかといった、「生き方」について考え、話し合う機会として、ACPは拡大されて捉えられつつある（御手洗 2016）。エンドオブライフケアは、市民自身がそれについて考え、話す機会をどう促進するか議論がシフトしている。

(2) エンドオブライフの QOL を改善するアプローチを模索する研究として、前述の ACP 促進研究や、「good death」と呼ばれる望ましい死の構成要素とその達成の研究がなされてきた（Steinhauser et al. 2000, Miyashita et al. 2007）。しかしその多くは余命半年以内の患者に対する医療施設等におけるケアが対象であり、それ以前の健康な段階での市民への介入研究は少ない。また、市民がエンドオブライフについて考え、話すことを重視する概念として、エンドオブライフコミュニケーション（end-of-life communication）という概念が新しく登場している（Matthiessen et al. 2014）が、それを促進するためのモデルは開発されていない。ヘルスプロモーションの分野では、市民への健康教育の観点としてヘルスリテラシーの地域促進の研究がある（Ishikawa et al. 2008, O'naill et al. 2014）。しかし、これらは医療専門職による医療的知見や知識の提供モデルに留まる。一方、市民を主体としたエンドオブライフについて語り合うことを趣旨とした、いわゆる「死生観カフェ」の試みは増加している。しかし、各事例の比較・統合、参加者の経験や価値が活かされる学習モデルの開発はなされていない。したがって、市民がエンドオブライフについて考え、話す機会となり、専門職による医療的知識の提供と市民の経験や価値が統合され、狭義には終末期の意思決定に有用となり、広義にはよりよい人生の発展を可能とする、死生観教育の学習モデルは何か、本研究の核心の問いである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、専門職による医療的知識の提供と市民の経験や価値が統合され、市民がエンドオブライフについて考え、話す機会を提供可能とする、市民を対象とした死生観教育の学習モデル及びプログラムの開発である。

## 3. 研究の方法

哲学・教育学的研究：エンドオブライフに関わる市民の経験や価値が内省されて発展していくための学習モデルの構築

死の問題を人間はいかに捉え、それが人生の意味とどう関係するかは、死生観教育の難問である。Heidegger (1926), Arendt (1958)らの死生観や人間のコミュニケーションに関わる哲学の古典的著作及び最近の研究を参照し、エンドオブライフ（あるいは死生観）に関して人が、「話す」「聞く」「考える」ことの意味の再定義を試みる。また、近年の成人教育の研究は、人間が人生の中で直面する課題にどう対応し、内省を促進するかについての成人教育モデル（Knowles 1987, Jarvis 1997）を開発してきた。これらのモデルの応用可能性を検討する。

## 4. 研究成果

(1) 本研究の端緒的成果として、日本生命倫理学会において「医療における対話の概念：成人学習理論の検討及び生きがいの視点から」を発表した。ACPにおける「話し合い」には、当事者が「言葉にする・言葉を伝える」という自発的側面が含まれ、そのことがACPを貴重であるが困難な介入としている。本稿では、成人教育理論における変容学習理論（J. メジロー）を検討し、それまでの人生観では乗り越えられないような人生の危機に直面した人を対象にした学習理論としてユニークなモデルを提起する一方で、なお、「言葉にする・伝える」行為につきまとう傷つけられやすさについて十分に吟味していないと評価した。そのうえでメジローの理論に、「生きがい」あるいはdignityの概念を加味する必要性を示唆した。

(2) 本研究の推進のさなか、未曾有のコロナ・パンデミックが世界を席卷した。コロナ禍は、本研究の中心課題である「対話」においても、大きな変容をもたらした。この間のアクチュアルな課題について、「コロナ禍におけるエンドオブライフへの影響と「文化」の意味」という論文にまとめ、日本エンドオブライフケア学会誌において投稿した。コロナ禍の中、遺族ケア・グリーフケアの領域で引き起こされた問題とその解決策を、「文化」の概念の再検討をとおして明らかにした。コロナ禍における感染対策とそれを巡る混乱が、適切な遺族ケアやサポートを困難にした実情を新聞記事及び英語圏のラピッド・レビューをとおして示した。人文学領域の先行研究を検討し、文化とは、生活の根底にあり、繊細で見過ごされやすいが、生活をつくるものであり、とりわけ、労わりや愛を可能にする「生活の肌感覚」であると定義した。コロナ禍においては人の生と死における「文化」の側面が尊重されづらい傾向にあり、改めて、医療とは、「文化」としての生と死を人間が送ることができるための援助であるべきと論じた。

(3) 日本における死生観教育のモデル開発として、本研究では医学・看護学領域および哲学・教育学領域における「対話」のモデルをもとに考察をすすめてきた。本研究の成果として、「対話とは何か——対話の自己内対話性」の論文をまとめ、日本総合人間学会上のオンラインジャーナルにて投稿した。「対話とは、自分の言葉が大切にされる体験であり、暴力を遠ざけるもの」という暫定的定義を提唱した。それを補助する対話の4つの性質を以下のようにまとめた。

1、推論(discourse)がひとりで行う行為であるのに対して、対話(dialogue)はひとりでは行えない。

2、対話をするとき、ひとは自分自身とも対話している。(対話の自己内対話性)

3、自分自身との対話とは、思考のことであり、対話においては(思考に由来する)「自由な迷い」がある。

4、のびやかな雰囲気の中かで、他者に対して、またそれ以上に自分自身に対して意識が開いている。

(4) 対話のもつ暴力への抵抗的性質、あるいはより正確には、を暴力ではない別の生き方に導く性質については、今後さらに研究を推進する必要がある。

医療におけるアドバンスケアプランニングをはじめ、対話の重要性は社会的に注目されつつある。本研究成果は、当初の計画である具体的な死生観学習モデルを提示するには至らなかったものの、対話の意義をコロナ禍をふまえて定義しなおした。アドバンスケアプランニングや、人生の捉え返し(ライフレビュー)にも応用可能な定義として、今後さらに種々の現場に即した具体的なモデル開発を進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋在也	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 生活の繊細で感知されない側面: コロナ禍の課題から考える エンドオブライフケアにおける文化の役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋在也	4. 巻 vol.44 no.11
2. 論文標題 支援と自己表現の交差点としてのACP	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護展望	6. 最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Nagae H., Takahashi Z., Sakai S., Harasawa N., Kawahara M. et al.
2. 発表標題 Development of Educational Program for Mixed Groups of Citizens and Healthcare Providers to Facilitate Readiness Toward Advance Care Planning
3. 学会等名 Europe Association for Palliative Care World congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩崎孝子、加藤裕規、高橋在也、坂井志麻、原沢のぞみ、川原美紀、田村恵子、長江弘子
2. 発表標題 市民と専門職で協働する日本型対話促進ACP介入モデルプログラム：インタビューによるプログラム評価
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋在也
2. 発表標題 医療における対話の概念（成人学習理論の検討及び生きがいの視点から）
3. 学会等名 生命倫理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋在也
2. 発表標題 生の支援における対話の意味 成人学習理論における対話・学習・社会的文脈を焦点として
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会第2回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takahashi Z., Masujima M., Sato N. & Ishibashi M.
2. 発表標題 Challenges of Community-based Advance Care Planning in Japan
3. 学会等名 World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy, Hong Kong (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------